物語の王国

我が名はSHUNKAN

村松友視

白水社

我が名はSHUNKAN

白　水　社

著者略歴
一九四〇年東京生
一九六三年慶應義塾大学文学部卒
主要著書
「時代屋の女房」（直木賞）
「酒場横丁の人々」
「作家装い」
「巴川」他多数

物語の王国
我が名はSHUNKAN
一九八九年一〇月二五日印刷
一九八九年一一月一〇日発行
著者 © 村松友視
発行者 高橋孝
印刷者 田中昭三
発行所 株式会社 白水社
東京都千代田区神田小川町三の二四
電話 営業部〇三（三九）七八一一
編集部〇三（三九）七八二一
振替 東京 九一三三二八
郵便番号一〇一
理想社印刷・黒岩製本
ISBN 4-560-04550-X
Printed in Japan

我が名はSHUNKAN

装幀＝司　修

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一章

治承二年の夏ごろより、京の都にはしきりと強盗横行の噂がながれた。だが、都びとにはその噂をどのように受け止めてよいのか、それがつかめぬもどかしさがあった。噂は、かならず何者かによってながされ、ながれた噂によって誰かが捕えられ流され殺される……このところのそんなくり返しが、疑心暗鬼の日々を生んでいた。そして、いまながれている噂をそのまま信じるよりも、それが誰によってながされたかを探り、誰と誰が罪に陥れられることになっているのかを詮索した。このような都のあり方ひとつも、「平家にあらずんば人にあらず」とその栄華を思いのままにしていた平家に、どんよりとした暗雲がのしかかってきた兆しだと言う者もあり、それもまた誰かのな

がした噂かも知れぬと、都びとは背筋のうすら寒くなるような日々を過しているのだった。

都びとの頭には、一年前の鹿ヶ谷の一件が、まだおぼろげに残っていた。うしろは三井寺につづき、前は洛陽はるかに見下ろして、在家もない如意岳の深くにある鹿ヶ谷……その密事を行うには究竟の閑室において、平家を滅ぼすべき謀議が行われ、それが露見して一大事に到らずにすんだ。入道相国清盛は、この謀議の主謀者である藤原成親を備前に流し、藤原師光すなわち西光を殺し、その子師高・師経も殺された。成親の子成経、平康頼、僧俊寛は鬼界ヶ島へ流された。そのあと、流された先で成親が流人として殺されたという風の噂が耳にとどいたとき、都びとはあらためて鹿ヶ谷事件の奇妙さを感じた。

主謀者の藤原成親は平重盛の義兄であり、その子成経は平教盛の婿だ。一家の縁者が謀叛の主謀者だということも不思議だったが、それが露見するや簡単にその命を絶ってしまった清盛の非情さにも、人々はいまさらながらに寒気をおぼえた。そして、

都びとをとまどわせるもうひとつの噂は、鹿ヶ谷の事件のうしろ立てとして、どうやら後白河法皇の影が取沙汰されているらしいことだった。院と平氏のあいだが一触即発の状態であることを、都びとはその噂から感じ取った。

鹿ヶ谷の諫議の件は、とりあえず不問のまま落着したかたちとなった。それは平重盛の諫言によって清盛の激昂がおさまったせいであったとか、やはりさまざまな憶測が飛び交ったが、それらのうちの何が真実やら、答えの出ぬ風聞が宙をさまようばかりだった。そんな中で、清盛の娘でのちに建礼門院となった徳子が、高倉天皇の子をみごもった。皇子が誕生すれば平家の栄華はますます光り輝くと、清盛をはじめ平氏の面々は大いによろこんだ。だが、中宮徳子は月が重なるにつれ、軀の苦痛に悩まされる。そこに手ごわい物の怪(けい)までがとりついて、不動明王の縛にかけると、物の怪の正体があらわれた。そして、讃岐院(さぬきのいん)の御霊、宇治悪左大臣頼長(よりなが)の怨念、新大納言成親の死霊、西光法師の悪霊、鬼界ヶ島へ流された者の生霊などと名乗った。清盛は、これらの死霊に対する手当てをしたあと、鬼界ヶ島の生霊のことに思いをいたし、これ

を赦免するとの決定をしたという。だが、都びとは、どれが確かとも判別できぬこのような噂ばなしに、なるべく声を出して関わらぬようにしていた。

（どうやら院と平氏のあいだに、これまでにない緊張が生じているのだけはたしからしい……）

そんなときに下手に口を開かぬよう、首を縮め目を細くして、じっと時をやり過しているというふうだった。だが、頭に生じては消えるおびただしい想念が呟きとなり、ときに都びとの喉を押し開け、唇の内まであふれることがあった。彼らは、それをまた一気に呑み込んで腹へおさめたつもりだったが、ときおり押し殺したうめき声のようになって、その呟きがほとばしり出ることがあった。京の都には、そんな弱々しくも用心深い呟きがふくれ上り、それが天に滞って暗雲を成しているかのようだった——。

ふる里の軒のいたまに苔むして思ひしほどはもらぬ月かな……東山双林寺の山荘で、

法衣に身をつつみ庭を打ちながめた平康頼は、目を少しばかりうるませて自作の歌を口ずさんだ。

かたわらの妻浪路は、そんな康頼をちらりと一瞥し、何か言いたいのをこらえているふうである。

「それにしても……」

夫がまたいつもと同じ言葉をくり返すけはいに、浪路はもはや我慢できぬとばかり坐り直し、きっと康頼を見すえた。

「それにしても、それにしてもと、またもや同じお言葉でございますか」

「それにしても……そう思わざるを得ないのだから仕方がない」

「母上さまが、あなたがここへ到着あそばされる五日前にお亡くなりになったことを、いつまでもそのように……」

「いや、それがわたしには解せぬのだからいたしかたあるまい」

康頼は、吐き捨てるように言って妻をふり返り、またもや庭へ目を戻した。そして

大きく息を吐くと、これみよがしに母の位牌に一礼した。夫のわざとらしい表情をじっと見つめていた浪路は、今日こそは日頃の鬱積を口に出さねば腹の虫がおさまらぬとばかり、眦(まなじり)を決して夫の近くへ寄った。

「今日までじっとこらえておりましたが、もはやわたくしも我慢の糸が切れました」

「我慢の糸が切れた？」

「さようでございます。ふる里の軒のいたまに苔むして思ひしほどはもらぬ月かな……というお歌、あれはここへお帰りになられたときにお作りなされたのではございませんか。それを毎日毎日お口になされますのが、わたくしにはとんと合点が参りませぬ」

「これは、わが家の荒れようをわざと風流につくり変えた歌だ。わたしの本当の気持は、しばらく帰らぬうちになぜこのように荒れ果ててしまったのか、この家(や)の守(もり)をする者はいなかったのかというおどろきだ。なまじ歌に心得のあるゆえに、それを素

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

直に謳うことのできぬこの身がなげかわしいことよ」

「それは、わたくしを責めてのお言葉でござりますか」

「さあ、どうかな……。しかし、やっと鬼界ヶ島から赦免されて帰って見れば、家は荒れ果て母上は五日前に亡くなられたというのでは、うむなるほどと頷くわけには参るまい」

「それはどういう……」

「そなた、病身の母上のおそばに附き添っていてくれたのであろうな」

「それを、ずっとお疑いなのですか」

「いや、疑うというのではないが……」

「わたくしが、夫の母上のお世話を申し上げない妻と……」

「よそう……」

康頼は、浪路から目を外し、握りしめた拳をじっとみつめていた。そして、短冊を手に取って宙にかかげ、何事かを思案する顔になった。その様子をしばらくうかがっ

ていた浪路は、つっと膝を進めると康頼の顔をのぞき込むようにして、
「このたびの御赦免のことでございますが……」
ひとつひとつの言葉に対する夫の反応を見逃すまいとするかのように、ゆっくりとした口調で話しかけた。
「そなた、時折そのような恐ろしく冷たい目でわたしを見るのを自分でも知っているのか」
「でも、あなたが何もおっしゃらないので……」
浪路は、夫との会話が堂々めぐりせぬよう気をくばりながら、
「今回の御赦免から、何ゆえに俊寛どのばかりが外れたのか……都びとはそんな噂をしきりにいたしておりますゆえ」
やっと決心した言葉を切り出した。
「嘘じゃ」
「……」

「都びとがそのような噂などしているはずはない。第一、今回の御赦免は内々のお布令であって、ごく少ない人々のみの知るところなのだ」

「それでは、都びとの噂はともかく、俊寛どのは何ゆえにひとりだけ残されたのでございますか」

「俊寛どののことを、そなたがそのように気にかける理由が分らぬわ」

「……」

「鹿ヶ谷の山荘は俊寛どの持ち物、そこを謀議の場所と名指されたのが不運、わたしたちとはちがって重い罪となられたのじゃ。それがそなたの気にかけることの理由、とくに隠し立てするほどのことではないわ」

「鹿ヶ谷の山荘、あれは俊寛どのの持ち物ではありますまい。かの謀議とやら言われる一件の少し前、静憲(じょうけん)さまから俊寛どのへ……」

「これ……」

康頼は、あたりに目を配って人差指を唇へ押し当てた。

「せっかく落着したものをむし返すようなことを口にすれば、謀議の一件は最初から洗い直されてしまうのだ。それともそなた、わたしがそのような身の上になる方がよいとでも思うているのかな」

「いえ、そのようなことは決して……」

「それに、成経どのとわたしに御赦免があったについては、それなりの理由のあったこと」

「例の、あなたが鬼界ヶ島から流された卒塔婆の件でございますか」

「思ひやれしばしと思ふ旅だにもなほふるさとはこひしきものを……わたしの一心を賭けた歌じゃ」

「あの歌は、わたくしの耳にも伝わってまいりました。都中の貴いお方も卑しい人々も、鬼界ヶ島の流人の歌じゃと言って口ずさみ、涙を流さぬ者とてございませんでした。それにしても、薩摩潟からはるばると都まで卒塔婆のお歌が伝わったのは、まことに不思議でございました」

「まったく、竜神がわれを救いたもうたとしか思えぬことじゃ」
「まことに……」
「そなた、何かわたしに含むところでもあるのではないか」
康頼が疑わしげな目を向けると、浪路はそれには答えず、庭の木々をながめやっていた。康頼は、それを見て少し微笑んだが、その唇には冷たい皮肉の色が生じていた。
「わたしがこの庵へ戻ったとき、あまりの荒れさびれ方におどろき、一首詠んだものだったが、そなたいずれか遠方へ旅でもしていたのか」
「……」
「それに母上の死を思いかさねれば、この庵が長いこと手をかけられなかったことが察せられた。わたしは今までこのことを口にせず、ただ母上のご病気を看取ってくれたのかとくり返してきたが、もうひとつ聞きたいことがあったのじゃ」
「それは……」
「そなた、厳島（いつくしま）の方へ出かけたことがあると、つい先日人づてに聞いたが」

「誰がそのような」
「誰でもよい、わたしはそなたの口からそれを聞きたいのじゃ」
「わたくしは、たしかに厳島へまいりました……」
浪路は、覚悟を決めたというふうに唇をかんだ。
「そして、辰助に会うたか」
康頼は、はっきりとした詰問の口調になっていた。
「どうしてそれを……」
浪路は、信じられぬという様子で目をしばたたいた。
「これ浪路、辰助に会うたとなれば話は早い。そなたがもうひとつこのわたしに心をひらいてくれぬのは、そのためであろう。そうとも浪路、たしかにわたしが流したという卒塔婆は、かねてより辰助に渡してあったものを、時期を見はからって鬼界ヶ島からこのような物が流れついたとの噂を広めてくれと、金子をやって頼んだものだ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com